

葦の髄から……ザンビア東部州ペタウケの15年

■小倉充夫（津田塾大学教授）

1989年以来15年間、私が通っているペタウケ県の二つの小村はザンビアの首都ルサカからおよそ400キロの所にある。この地域は南ローデシア、トランスヴァール、ザンビア北部の鉱山都市、そしてルサカへと、長年にわたり出稼ぎ労働者を送り出してきた。送り出し社会であるこれらの村を調査している間に、村の知り合いが何人も亡くなり、食事などの世話をしてくれた若い女性も次々と病死した。他方で私の車の鍵をいたずらして隠し、村中を騒がせた少年は逞しい青年となり、今では私を助けてくれる存在である。

繰り返し訪問するうちに気づいたことは、中高年者で帰村する人がほとんどおらず、数少ない新たな転入者もこれらの村の出身者でないという事実である。農村間での移動は著しく、出生、成長、結婚、そして離別・死別など、人生の様々な段階で人々は住む村を変えている。このことにより多少とも縁のある村を人々は複数持つことになる。

さて退職後、都市から村へ帰ろうとする人々にとって、村への再適応は大きな試練である。都会的な生活様式、あるいは資本主義的な世界に染まった自分や子供たちが相互扶助や平等原理の強い村で生活することになるからである。この適応が上手にいかなければ、村で揉め事や嫉妬を引き起こし、はては呪術による危害を恐れなければならない。したがって近親者との争いを起こしかねない村を避ける必要がある。帰村とは出身の村へ戻るということを必ずしも意味せず、人々が複数の選択肢から選んだ村への移動なのである。

公文書館の史料や農村での聞き取りにより、私は出稼ぎ労働の変遷を明らかにし、その中で近年の特徴をとらえようとしてきた。20世紀は植民地支配、冷戦と独立、そして冷戦後の民主化と構造調整の時期である。冷戦の終焉や「グローバル化」の影響は二つの村にも及び、われわれはこの二つの村から世界の変化を見ることもできる。ところが出稼ぎ労働に着目すると、その形態に若干の相違はあれ、送り出し社会としての役割を一貫して果たしてきたことがわかる。その様な構造に基本的変化はないのである。しかしペタウケ県の県庁所在地と近隣の村々との人や物の交流が活発化し、人々が農業と同時にインフォーマル・セクターに従事する小都市とその郊外に定住する人々も増えている。これらの動向にも今後注目していきたい。